出会いは時空を越えて…

私の心の中には〝米の文字〟が育ち続けている。それは実際のことなのである。

その、米の文字が一つの生命体となり、力をつけて光を発し、そして、人生の道明かりとなっている。いわば、米の文字こそ私の人生観を変えた灯台明かりといえばいいかもしれない。また、米は田んぼであり、稲であり、酒となる。

私にしてみれば、二六年来の新しい習慣である〝米〟を思う心が、田・稲・酒などの文字となって、文字的磁場のファイルに送り込まれている。また「米」は、数的には、八十八（＝十六＝七）というひびきを持っていることから、数的磁場のファイルにも送り込まれる。

この心の磁場から四方八方に、文字と数と色の、いのちの光が飛び出しているのだと私は考えている。文字、数、色という心のファイルに収められている心の集団は、本人

が気づかないだけで、常に触覚の働きとなって、無意識の中でも四方八方に、心の光を発信し続けているのである。物申す文字、数、色となって、自分の心のファイルから発信を続けていること、そして、反動し反発し、引き合い押し合いして、縁結びとなる心のメールを送ったり受けたり、繰り広げているのが世の中の実際の姿といえる。

そして、ある日ある時、共振共鳴をして感動の一瞬を迎えることになる。その出会いの強弱によって、伴侶となったり、運命のターニングポイント（転機）となったり、いろいろな運勢運命の結果となって、目の前に現れてくる。文字的共振性一つとってみても、その奥には、そうならしめる起因となる魂が働いていることを考えることができる。

一つの例として皇太子さまの婚約決定がある。

平成五年一月一九日、皇太子さま（三二才）と小和田雅子さま（二九才）の婚約が、午前八時半からの皇室会議で、正式に決定された。

そのとき、私の心に一際強く飛び込んだのは、「田」の文字であった。〝田〟の文字の共振性が、次のように図解できるのではないかと思ったのである。

皇后陛下
旧姓・正田美智子さま

皇太子さまと
小和田雅子さん
一月一九日婚約決定

田（稲・米）

美容院の先生
多田さん

二〇日・小和田家に
お祝いの手紙を持参した小学生
福田さん

田園調布雙葉学園時代の先生
和田先生

天皇家の皇祖神は、太陽信仰を起源とする天照大御神といわれており、伊勢神宮の内宮に主祭神として祀られている。

この伊勢の地に鎮座された年代は、垂神天皇二六年といわれている。それより約五〇〇年の後に丹波の国より、豊受大御神を迎え祀られたのが、外宮である。

豊受大御神は、衣食住やあらゆる産業などの守護神といわれているが、特に、食の神として認識されている。その中心を成すのが、稲作（米＝田）であり、神宮の祭事といえば、五穀豊饒の祈念祭から始まり、神嘗祭、新嘗祭へと延々と執り行われる。まさしく、神宮の祭事は、稲（米＝田）に集約された五穀豊饒と感謝の祭りといえる。

天皇は、国を治めるにはまず国民の命を守ることを中心におき、その中心こそ、稲（米＝田）であり、「いね」は「いのちの根」とも響くではないか。

伊勢神宮に豊受大神を祀られて、すでに一五〇〇年。天皇家の祭事の中心に、いのちの中心としての稲（米＝田）を尊い神として祀られてきた歴史こそ人のあゆむ道だと、私には感じられてならない。天皇家代々の霊魂の磁場として、稲（米＝田）は消しがたい心の文字的磁場と考えてもいいのではないか。

小和田雅子さんに響いた〝田〟の文字のひびきは、奥深い魂のひびきではないかと思える。見えざる魂のエネルギーが、あるいは、文字的エネルギー媒体となって、縁結びに一役を担っていたのかもしれない。

さて、自分の心のファイルの中に、はたして共振共鳴力を持つ文字的、数的、色的、心の磁場がどれほど形成されているであろうか。そのエネルギーの強弱が、人生の中で

の縁結びに大きく作用してくる。

皇太子さまと小和田雅子さんの婚約決定で、私の見る目は、「田」の文字という、ごくごく陰の次元から、その縁の流れを感じている訳である。

だが、「田」の文字の共振共鳴は確かにそうなのであるが、その他の人たち（多田・和田・福田）は、実際に存在したのだろうか。

平成二一年四月九日（旧暦の三月一四日）に、図書館で当時の山形新聞と読売新聞の縮刷版（№四一三）を調べてみたが、私が図に示した方の名はまったく見当たらない。他に調べようもないから、自分のノート記録を信じることにした。

帰宅すると一通のハガキが届いていた。米沢市立図書館からの図書寄贈への礼状である。それを見て、私の内なる磁場が動き出した。文字と数の心の磁場が共振共鳴を始めたのである。

米沢の〝米〟の文字

住所の〝三―一四〟（三丁目一―一四）

読売新聞・縮刷版の№〝四一三〟

今日四月九日は旧暦の三月一四日で〝三一四〟

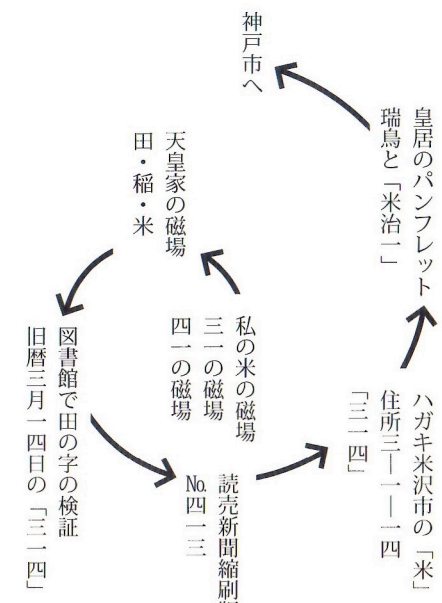
それだけではなかった。テーブルの上には、宮内庁病院の看護士（斎藤妙）から送られてきた皇居のパンフレットが置かれてある。写真には、アップで写る「瑞鳥」の彫刻が凜としてその威光を放っていた。この原型制作を成された方は、「米治一」先生。ここで〝米〟の文字が待っていたのであった。

次々と内的世界にうごめく魂の潮流を感じた私の心の磁場には、米の文字が育っており、また、三一（一三）と四一（一三）の数が育っているから、米と三一と四一が激しく共振共鳴を始めているのが心の高鳴りで感じることができる。

このような、心の内界と外界がともに反応し合うメカニズムにこそ時空を越えた出会いがあり、縁結びのリズムの原型があるのではないだろうか。

深遠で霊妙で正確無比で、いかなる微細にも目を届けているいのちの目は、絶対調和力の宇宙生命の目であると思うのである。

婚約決定の〝田〟の文字から発したこれらのことは、一見無関係のように思われるところだが、実際には密接な心の糸で、それらの関係性を結んでいる。それを図解にすると次のようになる。



思えば通わす命綱。心に思うことは、心の畑に心の作物を育てているのであり、それを食べてどこへ行くかは、ここまで読み進めてみれば、はっきりしてくると思う。

思い抱くこと、また、行動することのすべてが心の磁場に記録され、それが人生街道の道先案内役となって、喜怒哀楽を生む人間模様をつくりあげていく人生。

心の磁場に育った文字のエネルギーは、米のセンサーとなり、命数となる数霊のセンサーとなって、全方向に目を向けて行動を起こす。ましてや、米の文字は、四方八方に光を放つ姿に見えてくるではないか。

私は、酒乱断酒の日から、米（稲）を精神修養の信仰の対象として、毎朝三畳間でヨガを行い、それが終わると自作の「祝詞（のりと）」を唱えてきた。それは稲穂（米）に感謝する一心の日々であった。門外不出のその祝詞をここに開かせていただく。

「米の祝詞」

変われども
時代変われど
いのちの光
米は変わらぬ
永遠（とわ）の糧（かて）
鶴千年亀万年
稲穂の実りは億万年
人類栄えの糧となる
米が光ればみな光る
お陰で今日も生かされる

鶴亀農場で収穫した秋の実り

ありがとうございます

と唱え終えてから、たわわに実った稲穂を抱えている妻の写真を見ると、一緒の喜びが湧いてくるのである。二人で原野開拓をして、そこで育った稲穂を抱いている妻の姿である。

これらすべては、酒乱からの脱出であり、酒の親の米に学ぶ心を目指して早や二六年となった。心の中には、米（稲）のいのちが輝き続けている。そして、「豊かな稲穂のように実りの頭を下げる人になれますように」と。

ここで、稲穂を抱えた妻の写真のことから、意外な共振共鳴に発展することになった。

皇居の瑞鳥と米治一先生まで結ばれた一連の出会いから数日後の四月十八日のこと、神の扉が開かれるほどの感動を迎えることになった。それは、神戸市在住のご夫妻との出会いのご縁であった。

その日、かねてより大判に引き伸ばしたいと思っていた稲穂を抱えた妻の写真が、ようやくできあがった。それを早速妻に見せると、写真の前に正座して見つめていた妻の口からふと出た言葉が、

「実れば実るほどコウベ（頭）が下がる稲穂です。コウベが下がる人になりたいものです」

妻はしみじみ言い終わってから畳に額をつけ、二、三回繰り返していた。そばにいた私はすかさずジョークを飛ばし、

「神戸の次は姫路か、岡山か、上りは大阪だから…」

つまり「頭（コウベ）が下がる」こと、新幹線の駅名と上り下りのことをもじって、神戸、神戸と呼んだのである。

妻は、そんなことにはまったく反応せずに、真に稲穂の実りの姿と心を重ね合わせていたのであった。そして何を思ったか、田んぼのサクラを見に行こうと言いだした。急に、夕刻近い四時に出発したのであった。

鶴亀桜と名付けられたそのサクラは、樹齢一二〇〇年の薬師櫻の苗木を植えたものであった。昨年は目を見張るばかりの満開を見せてくれたが、今年は枯れ枝が目だって花の数も少ないし、色も淡く、心配になった。満開前というのに緑の葉が開き始めてもいる。

これは異常だと察し、帰りは村を大きく迂回しながら他のサクラを見て回ったがそれほどの異常は見当たらなかった。そして、ここまで来たのだからと、少し上がって水芭

鶴亀桜と妻

蕉を見てから帰ることにした。

水芭蕉の群生地は、うちの田畑からさらに鳥海ブルーラインを五、六分上がった地域に群生しているのだが、来てみるとこちらも異常のようで水は涸れて流水の姿は消えていた。清流の水芭蕉は清楚で心まですっきりさせてくれ、なかなかいいものだが、少々残念に感じ帰ろうとしたそのとき、鳥海山道を下ってきた一台の乗用車が停車して、中から壮年紳士夫妻がうれしそうに降りてきた。水芭蕉を前にしてご主人は撮影していたが、何故か夫人がそのままこちらに近づいて声をかけてきた。

「神戸からきたのです」

うしろでそれを聞いた妻は驚いて、

「あら、私たちも家にいるときから神戸の話

をしていたんですよ」

と、妻は続けて稲穂の実りの話を続けたいようであったが、二、三の言葉を交わした程度でここでいったん別れたのであった。そのまま帰ろうと道路に出てからご夫妻の車に目をやったことで事情は一変。車のナンバーを読んでみるなり心の次元がどこかに飛んでしまったのである。

水芭蕉と妻

神戸×××・×　81―88、その数霊の共振共鳴が激しくひびいた。妻は一〇月八日生まれで、心の磁場の数霊〝一八〟が動いた。そして、八八は米の数霊にぴったり共振共鳴していた。数霊で示している魂の通い合いの姿がここにあったのである。

先ほどは〝神戸〟の話で驚いたばかりであったのに、車の前に立つこ

81-88の車

とで、魂は不滅であることの確証を得た思いになった。

車のナンバープレートは、いわば魂の名刺なのである。文字と数のナンバープレートで自己紹介している姿に見えてくる。

〝稲穂が実って頭（コウベ）が下がる〟の話から、神戸、神戸とジョークで話が飛び出したのも、今ここで神戸のご夫妻と出会うための道筋であったことがはっきりと浮き上がってきた。

神戸の夫人は、奇想天外なこの出会いに感動して思わず妻と二人で抱き合いながら、共振の波は次々と押し寄せることになった。そして、妻が、

「わたしは一〇月八日生まれです」

感激のあまり抱き合う二人

と言うと、夫人の反応は早く、

「わたしも一〇月八日生まれです」

となった。さらに続けて夫人は、

「主人は八月一八日生まれです」

そして夫人はご主人に「名刺を上げてください。自宅の住所と電話もわたしの名前も書いてください」

と、息をはずませながら伝えていた。そして、

「わたしの名前は〝美穂〟です」

稲穂の〝美穂〟であるから妙を得て見事だ。稲の波動が伝わってくる。田のひびきが鳴り渡り、米の光が天地を照らしていく。スピード感に乗った話は次々と場面を移す。夫人は続けた。

「ここに来る前に車が脱輪したのでみなさんに応援していただきました。それで一時間ほど遅れて来

たのです」

ご主人はきまりわるそうに制止したかったようだが、夫人には届かない。すかさず私は話に入って、

「それは時間調整なんです」

と言った。この出会いに向けた時間調整は、いのちの中できちっと統御され、プログラムされていることを私は経験知でわかっていたのである。ご主人は納得された様子であった。夫人は続けて、「鳥海山が大好きなんです」と言う。さぞかし鳥海山もうれしいであろう。神戸からの車旅のご夫妻は、三年前も訪ねているというし、鳥海山にひかれる気持ちはこちらも同じことで、鳥海山は、妻と私にも運命的出会いとなった山なのである。

酒乱で迷惑をかけた翌朝、警察に私を引き取りに来た妻は、階段の窓越しに出会った鳥海山と生命一体となった瞬間、次のような心結びを受けたのであった。

〝窓越しの峰の心にあらわるる
　声むすばれて生き証人の姿なり〟

峰の心…とは、窓越しの鳥海山のことである。あれから二六年もの歳月が過ぎた。そして、今回このようにして鳥海山のふところの中で、神戸のご夫妻と出会ったことは、神の扉開きだったのかもしれない。

出会いの条件は、微細なところにもその微調整が行われていることをうかがわせてくれる。稲穂を抱える写真の大判作成であったり、急に見にいったサクラ、そのサクラの枝枯れ異常があったからこそ、水芭蕉に向かうことになった。ご夫妻の車が脱輪したのも、出会いのための時間的調整であったということになる。

特にこの日は一八日で、妻も神戸の夫人も一〇月八日生まれ、ご主人は八月一八日生まれということは、強烈なひびきである。数霊の輝きは魂の輝きである。

どうして微調整してまで出会いのレールを敷くのか。それは、人の心と運命を知らしめるための、死んでも生きている魂の証しのためであると、私はそのように考えている。

それら一連のことは、目には見えないいのちの流れの中で、連綿としてそれらの関係性をひびかせ合いながら、縁結びの開花結実へと道先案内していることは、現実問題としてとらえることができる。

この世の万物が普遍にして共有できるものといえば「いのち」の他に何があるであろうか。万物を貫き生かし続けているのは、いのちの光（原子・元素）以上のものはあり

得ないであろう。その、いのちの光となる原子（元素）は、天の気（呼吸）と大地の食物からいただくほかはない。

食は、自分の心を知る唯一のいのちの生き証人であり、縁結びのナビゲーターとなるのである。その核を成すのは主食の〝米〟であり、〝米〟は、人類救済の旗手として、億万年の実りになると私は信じている。

私たちは、神戸のご夫妻と別れて帰宅したが、玄関を開けるとその直後のこと、電話のベルが鳴りだした。受けてみると電話の奥から女性の声が聞こえてきた。

「〇〇美穂です」

今、神戸の〝美穂〟さんと別れてきたばかりなのに、耳元からの〝美穂〟さんは、広島の知人であった。

この世は卵が先か？

「意志の玉」

どんなことにも
どんなものにも
元がある
元には元があり
そのまた元にも
元がある

どんなことにも

どんなものにも
因がある
因には因があり
そのまた因にも
因がある

究極の元にも
究極の因にも
親がいる
丸い丸い真ん丸い
絶対調和の意志の玉
絶対調和の親の玉

何ごとも、元をたどれば、いずことも知れない無限の彼方へといざなう世界。この世は、その混沌世界の渦の中から生まれ出てきた。

日ごろ私たちが夢を見ることも、きっと、丸い丸い真ん丸い絶対調和の意志の玉、親の玉から生まれ出てくるのかもしれない。

平成五年二月二日火曜日の朝方に見た夢もそうであった。ここは、最上川河口に面した酒田港。私は、埠頭に接岸している豪華客船の二階デッキに立っていた。

しばしの間、乗り降りする人たちの波に目を奪われていた。かき分けながらでないと前には進めない。

ふと気が付いたときには、雨が降りだしそうな空模様になっていた。真下を見ていると、二人の男が通り過ぎようとしていた。うしろの男が太く通る声で付き人らしい前の男に、

「菅原ってあの人か？」

と、話しかけていた。

人混みの中でも私にははっきりとその声を聞き取ることができた。そして、その声の男が誰であるのかピンときた。元酒田市長の相馬大作氏だったのだ。

二人はそのまま人混みのなかに姿を消し、次に夢の場面は一変した。酒田港の全景が映し出されていた。

不思議なことに、よく見ると遠方にはさらに一隻の豪華客船がその船影をとどめていた。そのとき、夢の中で自分の思念が飛び出してきた。

「あの船はグリーン・ホテルで買ったそうです」

と、心が流れたところで夢から醒めた。時計を見ると六時四〇分を指していた。夢の中ではずいぶんと長いようでも、実際は数十秒くらいの短い演出であろう。目覚め際の半意識の中に、記憶にとどめようとする意図さえ感じられる。

朝食のとき、夢のことを妻に話してみると意外な言葉が飛び出してきた。

「それは六時四〇分くらいのことでしょ、そのころ私は部屋で片付けをしていて、一枚の写真を見つけたのです。元酒田市長の相馬大作さんの写真でした」

と言うから、私は息を呑んだ。

妻はさらに一言、

「それから箪笥の引き出しからグリーンのコートを出してハンガーにかけたんだよ」

と言うのである。

これは一体どういうことだと思った。夢と現実が、それも同時刻頃に同時進行形で共振共鳴していることに驚いた。

相馬大作氏の声と写真、それに、グリーン・ホテルとグリーンのコート。そのとき妻と私は、直線にして一五メートルほど離れたところにいたわけだが、事前の打ち合わせなどしているはずもなく、それなのに同じ頃に、

妻は自室で、元酒田市長の相馬大作氏の写真を見ていて、

私は夢で、元酒田市長の相馬大作氏と出会う。

また、

グリーンのコート

妻は自室で箪笥から〝グリーン〟のコートを出している。

私は夢で、あの客船はグリーン・ホテルで買ったという。

これらは、夢の現象と現実の行動とが文字的に激しく共振共鳴していることを示している。しかも、時間的にも一緒ということは、一体何がどうなっているというのか、その因果性が気になりだす。

私の夢をキャッチした妻のいのちが相馬大作氏の写真と、グリーンのコートを引き出す衝動にかられたというのか。あるいは、私のいのちが妻の現実行動を見ていて、それを夢にアレンジして演出したというのか。どちらにしても、心光波（造語）といえる心の波が一体化していたに違いない。心を光の電磁波と思う私には、その心の周波数が同一調整されている証しではないのかと思えてならない。

一体どちらが先か後なのか、妻が卵なのか私が卵なのか。あるいは、私がニワトリなのか妻がニワトリなのか。発信元はどちらが先か後なのか、いのちの世界は時空を越えた次元で共振共鳴現象を発現させてくれる。

それもそのはず、いのちは元々光であるし、電気的磁気的な原子（元素）の世界であるから、心の波の振動数や波の形によって、当然にして共振共鳴が起こる世界だといえる。心の周波数が同調して増強されたり、あるいは、干渉し合って心の波を弱めたりするのであろう。

いのちある限り〝意志の玉・親の玉〟に心のルーツが在るを知るならば、卵やニワトリ以前の元を知り、因を知ることに目覚めてゆくものであろう。

思えば寄せ来る文字と数

科学の世界で電子工学分野の活躍は目覚ましいものがあり、電子機能や通信機能によって、この世は驚異的な時代革新を遂げている。

その成果は生活全域までに浸透し、情報の氾濫に溺れそうにもなる。無視できればいいのだが、その濁流に呑み込まれている現状の中で、どうしたらいいものかとその恩恵に困惑することは贅沢な話かもしれない。

これほどまでに科学力を発展させてきた知的人類という生命体とは一体何物なのかと、ふと、ファンタジックな疑問にぶち当った。

ここで唐突なことを言わせてもらえば、この世の一切の生物は、地球がつくった生命ロボットのようなものではないかとそんな思いにもなってくる。ロボットならば地球の思いのままになるのではないか。

地球がつくった地球生物は、その生命ロボット別に、姿・形・心までもそれぞれの特性を持たされて、この地球上に生かされ続けている。そこに一体どんな目的があるというのであろうか。地球は生命ロボットをつくり上げて、さらに心までも吹き込んでいる。

その心は、地球自身の心であろうし、また、身体構造も地球自身のエネルギー構造を凝縮してつくられたように思えてならない。特に人類には知性を吹き込んだ。だが、今ではその知性が独り歩きしているように見えてくる。生命エネルギーの中核をなす核融合エネルギーを、脅しと実戦に使い始めている。

地球のいのちは、われわれと一緒で、呼吸をし、エネルギーの食事供給をしている。そのエネルギー供給源は、自給自足の核融合エネルギーといわれているから、半永久的ともいえる食の摂取といえるであろう。われわれもまた、その延長線上にある核融合エネルギーを生体エネルギーとして生きているのが実態であると私は思っている。

地球の血を引く生物として、その生命エネルギーは、核融合エネルギーに準ずるものであり、その供給源は〝食〟と〝呼吸〟による化学反応ではないのか。

毎日の食の摂取によってこの生命が維持されているのはいうまでもないが、その食物は、口から入って胃、十二指腸、小腸に進みながら、それら三部門それぞれの消化酵素によってアミノ酸次元まで分解され、小腸の吸収細胞から血液に送り込まれて各細胞に届けられる仕組みになっているといわれる。

端的にいえば、食物から吸収した生命元素（原子）が核エネルギーに変換されるからこそ、小さな生命体として生きていけるのだと思うのである。核エネルギーを食として呼吸する次元では、地球も私たちも同じ次元なのであろう。

生物は地球と同じく原子構造になっていることを考えてみたとき、いのちたち同志の心の発信、受信活動は、光（電磁波）の次元で交差されているのが、この世の実態ではないであろうか。

人それぞれに、何かを考えたり思ったり、また、声を出したり無言であったりと、心の光を発しているが、その心は一種の電磁波（光）であると思うから、それが時空を越えた次元で同調サイクルの心を持った人々に一種のひらめきにも似た心の動きを作動させると考えたとき、私は、〝思えば通わす命綱〟となって、何事かの意志が伝わると思うようになった。

人はそれぞれの思いのエネルギーを持っているが、その思いは電磁波（光）となって発信するとして、その周波数のチャンネルに心のチューナー（同調装置）が合うか合わ

ないかの問題であって、合えば、それとなく他者の心の何かを促すエネルギーとなるであろう。

心は微妙な電磁波（光）となって飛び放っている。自分の心の周波数に合わなければ、心は決して動かない。また、テレビやラジオのように、心を選局するなどという器用なことはできない。ところが、一心一念の時は、強い周波数の光を発しているから必ずや同調のチャンスがやってくる。

その一例を紹介してみたいと思う。それは、平成五年二月二〇日土曜日のこと。朝起きると妻は何やら忙しく動きだしていた。

「今日は二〇日でお婆さんの月の命日です。何を上げたらいいか…」

と言いながら、「あっそうだ白玉をあげよう」と決めたかと思うと、棚から引き出した一本の白玉粉を手に持った妻は、

「これは大山の白玉です。清子さんからいただいた白玉です」

と言ったものの、どこの清子さんなのかがわからない。何度も呼ぶから不思議に思っているとさらに妻は、

「横浜の荻野さんに送った米も清子さんからいただいたものです」

と付け加えた。今度は荻野さんに送った米の話に清子さんが出てきたのである。その荻野さんは私の大恩人。数カ月前に亡くなったのだが、一月二〇日生まれでこの日の二月二〇日に何かと通じるひびきが生まれていた。

こうして、朝から清子さんのひびきが続いたのだが、それから数時間後の昼下がりのことであった。久しぶりにやっと会えましたと言いながら訪ねてきた方は、左の手に小さな包みを持って立っていた。後藤清子さんであった。

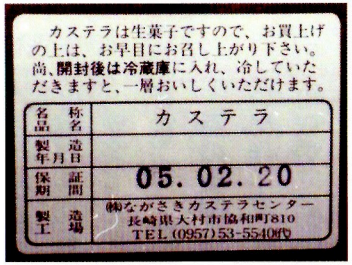
「二回訪ねたが留守でした。今日で三回目です」

と言ってカステラの土産を渡してくれた。このカステラが動き始めたのである。

賞味期限が、平成五年二月二〇日というのはこの日のことである。朝から清子、清子と、妻は呼ぶようにしていた。すると清子さんがやってきた。そして、五年二月二〇日期限のカステラ。そればかりではなかった。清子さんは、

「私は昭和五年二月二〇日生まれなんです」

いよいよもって文字霊・数霊のひびきが積み上がってきた。



賞味期限平成５年２月20日のカステラ

「今日、お父さんが出版社に原稿を送るんです」
と妻が言うと清子さんは、
「あら、うちの息子は出版社に勤めているんです」
と言った。共振共鳴の鐘は鳴り響きが止まなかった。。
話の展開は何やらしり取りのようだ。何かが動けば何かが動く、高気圧と低気圧が互いに作用反作用しあうようにして調和を保つ天気図のように、人の心の中もお互いに、知らずに反応しあっているようである。人の心には共鳴磁場があって、そこには、三つの魂の引き出し箱があるようだ。

心は魂の引き出しに入っている
引き出しは三つある
文字の引き出しと
数の引き出しと
色の引き出しに分かれていて
外の情報を受けて考える心と

内からわき出る心があって
考えた心の情報は三つに分かれて
魂の引き出しに収められる
文字・数・色の三つに分けて
魂の引き出しに収められる
引き出しの中でピカピカ光る心
生きて生きて生きようと輝く心
そして縁結びの船頭となって
いのち船を進める三つの心

この日は一〇月二〇日に亡くなった妻の母親の月命日で、二〇日の数霊が波のように寄ってきた。清子、清子と呼べば清子が寄ってきた。
噂をすれば影とやら…
想いが通じてクシャミとなり
というように、俗言が人の心の真実を伝えているようである。

カラスとクルミと納豆

とりわけ鳥類の特性には、空を飛ぶことができるすばらしい能力がある訳だが、その中でもカラスの霊眼は子ども心に聞かされてきた。物質を貫く透視力はひときわ優れているようである。

物質の中の光を見る能力というのか、あるいは、カラス自身の目からは、X線のような高エネルギーの電磁波（光）で物質の中を透視できるのであろうか。

人間が自然界にほうり出されたときのことを考えると、カラスと能力の優劣を競うことなど、はなからできない相談なのである。カラスも人間も優劣などない。あるのはその〝特性〟の違いといえる。

平成五年三月四日木曜日のこと。朝の運動に、スピード・ウオーキングを始めて三日目のことであった。歩くにもただ早く歩くのではない。一、二、三…一、二、三と、丹田呼吸を集中させながら力強く、それも早く歩く。

その日は、いつものコースを外れて酒田本港の埠頭まで足をのばしてみた。風もさわやかで、頭上ではカモメやカラスが楽しそうに風に身をまかせて飛んでいた。

ところが、カラスの様子がいつもとは少々違うことに気づき、歩くのを止めてしばらく観察することにしたのである。

空中に停止できるのは、ヒバリくらいなものだと思っていたのだが、カラスが空中で一時停止したかと思うと体をくねらせキリモミしながら急降下を始めたのである。そのとき、カラスは何かをコンクリートの埠頭に落としていたのである。

私は、カラスが退屈まぎれに遊びだしたのかと思ったが、三回目の急降下のとき落とした黒い物はエサではないかと感じたのである。何かを落として叩きつけて割っているのである。

そこへ大きな影が近づいたかと思うと、トンビがカラスに攻撃をかけてきて、カラスも危機一髪素早く反応して貨車の下に身を隠した。

カラスが空中からエサを落として割っている様子は、これまで見たことがなかった。カラスは再び私の前にやってきて、四回目のフライトに挑戦した。

カラスが割ったクルミ

そのとき、今度はカモメがそれをかすめとろうとして突入してきた。カラスは超低空に旋回したかと思うと素早く身をかわして上空に再び舞い上がり、一瞬の停止とともにその物を落下させると素早く急降下した。今度は二つに割れて大成功である。ピョン、ピョンと近づいて、それを右足で押さえつけ、嘴(くちばし)で中から実を取り出して食べ始めたのである。

何を食べているのかと息をこらしながら静かに近づくと、カラスは食べ終えたところらしく、残りを置いたままにして飛び去って行った。

それはクルミであった。中の果肉はほぼきれいに食われている。

家に帰った私は、カラスのクルミ割りの光景を得意げに妻に話してみた。すると妻は、

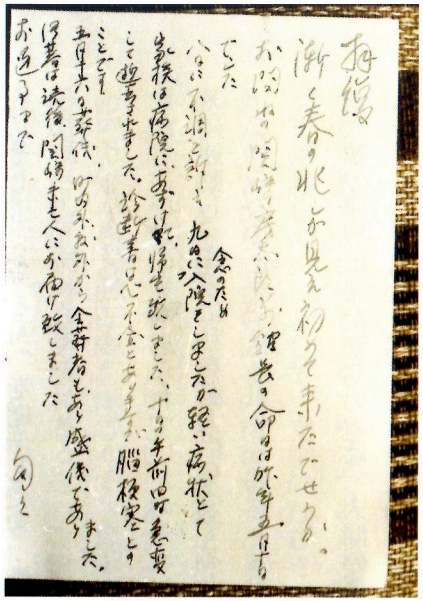
「あら、わたし今クルミ納豆つくったばかりなのに」と、言い出した。

クルミ納豆なんか、これまで妻はただの一度もつくったことはなかった。納豆といえば、梅干し・長ネギ・大葉など定番にしてつくっている妻が、どうして今朝はクルミ納豆にしたのか不思議に思ってその訳を聞いてみると、

「クルミは〝来る身〟なんでしょ」

と、意味深長な禅問答のように、妻は私に暗示を与えてきた。

この話が終わったのは一〇時一三分であったが、それからほんの二、三時間後に届いた一通のハガキが、クルミの謎を解いてくれたのである。



命日を知らせたハガキ

昭和六二年一一月三〇日に出会った長野県の信州新町美術館館長関崎房太郎氏が、平成四年五月一〇日に逝去されたことが記されてあった。館長職を引き継がれた塩入氏からのお知らせであった。

ハガキとともに、〝魂の御身〟がおいでになった。まさしく、〝来る身(クルミ)〟のひびきである。

私がカラスとクルミ、妻がクルミと納

豆、そして、〝来る身〟を暗示した妻。数時間後に、命日を知らせる霊魂の一報が届けられたという流れの現実がある。

ハガキの発信が三月二日だから、二日前にはすでに館長の魂が私たちにも深い心の次元からひびきの光を送られていたのかもしれない。また、心の流れが妻に連動し、カラスに連動し、さらに私を証人に見立てるという、生命世界の神秘は、威厳に満ちている。

これらのことを、私は単なる偶然とは受けとれない。偶然が日常的に起きていてはたまらない。

人類の発展に欠かせないのは、人間の優れた知性があるからである。その知性の中でも中心的特性として、人間は、文字を考えだし、数字を考えだし、色を考えだした。その、文明文化の土台となる文字・数・色の知性こそ、人類に不可欠の絶対要素となった。これこそが、人類の〝三愛の神器〟であると、私は思っている。

三愛の神器の中でも、中心軸となるのが「数」である。数字は、いのちのシンボル。また、数は、宇宙調和力の要(かなめ)を成すものだと思っている。

科学の世界は、数字と文字的記号や色の表現によって真理が探求され、それが次々と解明され進歩している世界だと思う。

数字と文字とその類型、そして、色彩文化は、人類に不可欠の神器となって、人間社会を支えている。安定調和力などは、数の量的バランスで表象することができるといえる。

言い換えれば、文字・数・色は、心という人間の意志を代弁していると同時に、自然界の意志性をも代弁していると言ってもおかしくはないであろう。

カラスとクルミの話からかなり飛躍したかもしれないが、届いたハガキを舟にして、関崎氏の魂がおいでになられたという表現もできようし、また魂は数字のひびきに乗ってこられたということもできるであろう。

その証しの一つとして、文字のひびき、数のひびきに置き換えてみるとき、クルミは九六三となり、さらにその和数が一八となり、関崎氏の誕生日が一〇月八日で、その和数が一八となり、一八と一八の数霊が共振共鳴している。

クルミ（九六三＝一八）という現実、妻のクルミ納豆づくりの現実、そして関崎氏の命日の知らせという時を同じくする現実、さらにこれらの現実を総括するが如く、証人となった私がいた現実がある。魂の数霊が共振共鳴することは、霊魂不滅の証しになると私は考えている。